第四十四回　台東薪能

令和六年七月三十一日（水）午後五時四十五分開演
於・金龍山浅草寺境内（雨天時　浅草公会堂）

演目の解説　児玉　信（能楽評論家）

〈火入れ式〉　木遣り・纏振り　第五區木遣り会

番組

能

清経

ツレ（清経ノ妻）石井　寛人
シテ（平清経）観世　喜正
ワキ（淡津三郎）舘田　善博

大鼓　柿原　孝則
小鼓　鵜澤洋太郎
笛　一噌　隆之

後見　中森健之介　遠藤　喜久
地謡　奥川　恒成　桑田　貴志　小島　英明　永島　充　角当　直隆　奥川　恒治　中所　宜夫　鈴木　啓吾

狂言

蝸牛

シテ（山伏）山本泰太郎
アド（主）若松　隆
アド（太郎冠者）山本凜太郎

〈休　憩〉

能

一角仙人

ツレ（菱陀夫人）佐久間二郎
子方（龍神）坂　瞳子
子方（龍神）角当　美織
シテ（一角仙人）坂　真太郎
ワキ（官人）宝生　常三
ワキツレ（輿舁）梅村　昌功
ワキツレ（輿舁）則久　英志

大鼓　柿原　弘和
小鼓　鵜澤洋太郎
太鼓　小寺真佐人
笛　一噌　隆之

後見　角当　直隆　奥川　恒治
地謡　金子仁智翔　奥川　恒成　中森健之介　桑田　貴志　小島　英明　鈴木　啓吾　遠藤　喜久　永島　充

附祝言

終演予定　午後八時五十分

【演目のあらすじ】　能楽評論家　児玉　信

能『清経』

観世　喜正

権勢を誇った平清盛が世を去ると、宗主宗盛をはじめ一門の運命は暗転。源頼朝を棟梁とする源氏の勢いに押された一門は、ついに拠点の都を追われ西国へ落ちていく。清盛の孫で、横笛の名手として聞こえた清経もその一人だった。一門の船団が豊前国（大分県）柳ヶ浦で停泊した夜、舳先に立ち月を仰いだ清経は苦境に喘ぐ一門の前途を覚悟し、この世の名残にと心を澄まして愛用の笛を吹き、愛誦する詩歌を朗々と歌い上げる。そののち静かに経を読み念仏を唱えて入水した（『平家物語』巻八）。

雅な若き武人清経の最期の様子を、夢幻能として美しく描いたのが『清経』です。家来の淡津三郎が船中に遺された形見の鬢髪を携え、都で夫の帰りを待つ妻のもとを訪れます。驚き、深く嘆いて心乱した妻は、悲しみが増すばかりだと泣いて遺髪を突き返します。やがて、涙ながらに床に就く妻。と、清経の霊が夢枕に現れて「会いに来た」と言葉をかけます。「夢なりともまみえるのは嬉しいけれど、約束が違う」と恨み、拗ねる妻。清経の霊は「私こそ恨み。心を込めて送った鬢髪を何故に返した」と言葉を返すと「すべてを語り聞かせる、今はもう恨みを忘れてほしい」と述べ、最期に至る一部始終を物語ります。この世の儚さ、無常が色濃く漂って胸に迫ります。

狂言『蝸牛』

山本泰太郎

出羽国羽黒山（山形県鶴岡）の山伏が修験道の聖地である大峰山と葛城山（奈良県）での修行を終えて山を下り、国許への道を急いでいたが、あまりに朝早く旅立ったので眠くなり、一寝入りしようと途中の藪に入った。と、そこへ太郎冠者が現れる。太郎冠者は、「長命の祖父がなお長命を保つようカタツムリを食べさせたい、取ってこい。藪にいる、頭は黒く腰に貝を着けている、時々は角を出す、大きいものは人ほどになる」などと教えられてやってきたのだった。広い藪の中を探すうち、横たわった何かが足に触れた。覗いて見れば頭が黒い。実は黒く見えたのは先ほどの山伏の兜巾だったが、さてはカタツムリ、と思い込んだ。次々頓珍漢な問いをする太郎冠者を、世にはもの知らずな奴いるものだと呆れつつ、山伏は面白がってカタツムリに成りすまし、からかい始める…。

陸に棲み殻を持つ巻貝がカタツムリです。デンデンムシ、マイマイなどとも異称されます。蝸牛もその一つで、蝸がカタツムリを表します。山伏が太郎冠者をけむに巻く呪文のような歌「でんでんむしむし」も、何となく懐かしく面白いものです。

能『一角仙人』

坂　真太郎

ガンジス川流域にあったという古代インド波羅奈国（ばらなこく）の山中で、仙人の精を飲んだ雌鹿から生まれた。このため、頭に一角があり、鹿の足を持つ―なんとも奇異な出生をしたと伝えられる一角仙人。何事も自由自在にできる超人的な能力を具えたこの仙人が、美女の色香に惑わされて転落する姿を描くのが『一角仙人』です。

雨の山道で足を滑らせ転んだことに腹を立てた一角仙人は、雨をつかさどる龍神を岩屋に封じ込めてしまった。ために波羅奈国では長く雨が降らず、村人たちは困窮する。秋のころ、事を憂いた王の命を受け、官人は世にも稀な美女旋陀夫人（せんだぶにん）を伴い、山道に迷った旅人の体で仙境深く分け入る。と、そこに一角仙人の庵があった。額から鹿の角が生える異様な姿を見せた仙人は、官人たちを庵に招き入れると、ただの旅人ではあるまいと素性を問いただす。それを聞き流すように官人は酒を勧めた。否と断って、仙境では松の葉を好み、苔を身に纏い、桂の露を嘗めて不老不死となると語る仙人。官人は志を受けてほしいとさらに勧め、こんどは夫人が酌に立つ。仙人が盃を手にして酒宴となると、夫人は「面白や」と謡いつつ優雅に舞を舞う。生まれて初めて口にした酒に酔い、陶然とした面持ちで夫人の舞を見つめていた仙人は、やおら立ち上がって見様見真似で舞を舞い始める…。

美女と野獣そのもののような二人の、微妙にズレる相舞が、ハラハラドキドキの楽しい見ものです。やがて仙人が酔い伏すと、術が解けて封が剥がされた岩屋から龍神が飛び出し、雨が降る展開となります。

華やかで変化に富む舞台。大人のおとぎ話です。